

株式取引所小論

中山英雄

新聞經濟欄を觀るものに強く感ぜられるのは、株式市場の不明朗である。所謂氣迷ひ相場の語で表はされた閑散な商内である。日支事變以來、僥倖的小康の相場を出しても、直ちに訂正され、結局勢のない動きをみせて居る。

斯る情勢から投機取引の衰退延いては株式取引所存在理由の危殆まで云々されて居る。

此の問題を根本的に究明する事は、未だ僅かな知識しか持合せない私にとつて、不可能であるが、此の知識（むしろ常識といふ方が正しいかも知れぬ。同時に常識的理解が往々本質を見誤るといふ事に依り、以下述べる事が大いに叱正を受けると思ふが）を頼りに、少しく考へて見たい。

株式取引所は資本主義經濟組織の心臓であるといはれる。實際あの東株取引所を訪れた時、周圍の空氣の緊張に打たれる事は確である。

株式取引所は一應の意味に於て手許になき、而して代替性を有する交換財に對する規則的に存在する、組織的市場である。即ち其處で取引される交換財（證券）は特殊性を失つた最大の代替性を有する商品であるが故に、單に種類の表示丈で取引が行はれ、此の特異な取引は、將來に於て果さるべき取引契約を可能ならしめ、斯くて取引所投機を成立せしめた。此の意味に於て、取引所取引は投機取引であるのが當然であり、取引所はレキシスの端的に指摘して居る如く「有價證券の投機が行はれる舞臺」である。

然らば、その成立の當初から必然的に投機を自身に内包する株式取引所の社會的機能はといへば、周知の如く資本動員を可能ならしめる事である。即ち取引所にて活潑に、自由に證券の賣買されるといふ事は、投資を促進するものであり、他方からみれば、證券發行、即ち證券に依る資金の調達を圓

滑ならしめ、此の意味に於て生産力發展に寄與するものである。而して此の活潑なる賣買は投機的賣買として行はれて來たのである。

斯る社會的機能は現段階に在りても、望ましくこそあれ否定されるとは思はれない。

勿論現段階が統制經濟とて、種々なる拘束を受け、資本主義に見ざる要素（或はいはん來るべき經濟組織の要素）を含むとはいへ、未だ基礎建築は資本主義であり、證券に依る資金調達の重要性は益々増大するものであり、殊に東亞新體制の爲の長期建設に對し、資本動員の一段の發展が要求さるべきであらう。此れを可能ならしめる爲、取引所の投機取引は「その活潑なる活動と隆盛」が期待される。勿論、是に謂ふ「隆盛」は往年の無軌道的なそれを意味するものではない。

唯、投機取引が今日迄、日本資本主義の急速なる發達に寄與して來た事を思ひて、今後の活躍を願つて居る。

然し取引所が投機取引によつて其の社會的機能を盡すに當り、弊害を生じて居る事は明かに認められる。

だが此の派生的弊害を責めて、投機取引所の社會的機能をも抹殺せんとするのは、餘り現象形態にのみとらはれた觀方

ではあるまいか。弊害を矯めて、投機をコントロールする事により取引所の社會的機能を十全に發揮せしめてやるという寛大さがあつて良いと思ふ。此の事を向井博士は性慾により例解されて居る。（甚だ適例でないかも知れぬと斷はられて居るが）「即ち性慾といふものは野卑に聞えるが、他方吾々種族の保存といふ貴重な職能が此れに依つて行はる。此の點から崇高な意義をもつ。併し、同時に又性慾あるために日常生活に弊害を起して居る。そこで社會組織は、成るべく派生的弊害を除いて其の崇高な本質的職能丈を行使せしめやうとして色々なコントロールを行ふ」といふ意味を述べられて居る。

（取引所投機の株式金融「四頁」）

幸か不幸か、打續く氣迷ひ相場で投機取引は萎縮して居る然し此れを直ちに投機取引、取引所機能の衰退に翻譯するのは早計ではあるまいか。むしろ新日本の生みの苦しみを如實に反映して居るものと見るべきではないか。此の苦しみを見ては取引所は從來の自由主義的取引所などを考へるような厚かましさは持たぬであらうし、否、強固堅實な機構を以て、その崇高な社會的機能を通じて國家に御奉公致さんと覺悟を固めつゝあるものと思ひたい。